

## 高大接続の新段階における初年次教育の 新たな役割と学会への期待

研究担当理事

本学会も設立から7年目を迎え、会員数も着実に増加し、初年次教育自身も日本の高等教育に定着を果たしたといえよう。

他方、日本の高等教育はグローバル化の進行、科学技術の進歩、少子高齢化、格差拡大などの社会的変化に対応した人材養成の在り方を求められている。2012年12月に出された中教審答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（以下では「高大接続答申」という）」では、高校教育、大学教育、入試の三位一体改革によって、学校教育全体を通じて学力の3要素の育成することが求められ、大学教育の改革に加えて、大学入試の在り方も2020年を目途に大変革が訪れようとしている。

本課題研究は、初年次教育が直面する高大接続に関係した課題とこれからの本学会が果たすべき役割や求められる対応について、①学会員調査結果に基づき、会員が現在感じている課題と学会への期待（関田一彦会員）、②文科行政の立場からの政策と責任（義本博司 文部科学省内閣官房審議官＝非会員）、③初年次教育実践をしてきた個別大学の立場から（濱名篤会員）、の3つの立場から、学会大会時に課題研究シンポジウムを設定し、報告をしてもらったものである。

本特集は、その報告内容とそれらの報告への指定討論者であった山田礼子会員の発言をもとに4本の論稿を掲載するものである。